

## リーダーズトレーニングにおける効果の検証

横山 誠<sup>\*1</sup> 相奈良 律<sup>\*2</sup> 森本 崇資<sup>\*3</sup>  
松尾 純子<sup>\*4</sup> 村瀬 浩二<sup>\*5</sup>

## Verification of the Effects of Leadership Training at Osaka International University

Makoto Yokoyama<sup>\*1</sup> Ritsu Ainara<sup>\*2</sup> Takashi Morimoto<sup>\*3</sup>  
Sumiko Matsuo<sup>\*4</sup> Koji Murase<sup>\*5</sup>

## キーワード

帰属意識、大学、課外活動

## 1. はじめに

昨今、国立大学・私立大学を問わず学友会などの学生自治組織と一体となりリーダーズトレーニングを実施している大学が数多く見られる。リーダーズトレーニングの対象や目的は各大学により若干の違いはあるものの、課外活動団体の幹部（主将・副将、主務・副務、部長・副部長）や学友会、大学祭実行委員会等を対象にしているケースが大半である。目的については、課外活動の活性化やリーダーの資質向上、大学と学生のとの意思の疎通・相互理解などがあげられる。

大学にとって、学生の存在は単なるお客様としての存在だけではなく、大学のブランドイメージを作り上げ、大学の顔となりうる大切な資源（人財）である。また、スポーツ系のクラブ活動においては、大学名の露出による宣伝効果は大きく、競技面での強さや組織としての団結力、明るさや爽やかさ等、スポーツ場面でのイメージが大学のブランディングに大きく貢献している。また、文化系のクラブ活動においても、地域の清掃活動や福祉関係のボランティア活動、音楽等様々なイベントなどを通じてまちの活性化に大きく貢献している例などもある。

今日、大学の使命のひとつとして地域貢献があげられる。1998年の大学審議会答申<sup>1)</sup>「21世紀の大学像と今後の改革方策について」において、地域の機関との連携・交流のための柔軟・弾力的な制度の整備を一層促進しなければならないなどが明文化された。それ以降、

\*1 よこやま まこと：大阪国際大学人間科学部講師（2010.12.15受理）

\*2 あいなら りつ：大阪国際大学非常勤講師

\*3 もりもと たかし：NPO 法人ナック

\*4 まつお すみこ：流通科学大学・武庫川女子大学非常勤講師

\*5 むらせ こうじ：大阪国際大学人間科学部講師

各大学で様々な地域貢献活動がなされており、日本経済新聞社産業地域研究所<sup>2)</sup>は、大学の地域貢献度ランキングを発表している。大学の地域貢献は、自らの研究活動や教育活動だけでなく、今や社会的評価としての意味合いも含まれているといっても過言ではない。また、大学の地域貢献活動は、地域に対する様々な波及効果をもたらし、その効果や期待も注目されている。

本学においてもリーダーズトレーニングは実施されており、各クラブの活性化だけではなくクラブ間の交流、大学教職員との懇談など充実した内容となっている。こうした活動を通じて各クラブはもちろんのこと、体育会、文化会なども成熟した組織となりつつある。今ではクラブの枠を超えた様々な取り組みがなされ、学生が主体となり新たな企画なども生まれてきている。そういったアクティブな活動は、学内にとどまらず地域に目を向け、自らで実践的なトレーニングや活動を行っている。具体的には、学内外での清掃活動や地域のこどもたちを対象としたイベント、スポーツ指導など、クラブ活動に所属する学生が様々な形で地域との架け橋となっている。それらの活動がメディアにも取り上げられ、学生のモチベーションは更に向上し、今後ますますアクティブな活動が期待される<sup>3)</sup>。

## 2. 本学におけるリーダーズトレーニングの歴史と近年のプログラム

昭和59年、女子大のクラブを活性化することが目的で、教員が主体となり開催したのが始まりである。その当時は、文化系のクラブの方が盛んで、運動系のクラブは連盟へ参加していないクラブも数多く見られた。そういった状況から、特に運動系のクラブのリーダーを育てる必要があり、文化系で組織としてある程度確立していたクラブを含め、リーダーズトレーニングが開催された。参加した学生間のつながりを持たせる事を目的として、当初から合宿形式をとっており、衣食住を共にし、様々な活動を通して話し合いがもたれた。当初は学友会が無く、リーダーズトレーニングは大学主催で実施され、教員からの講義等も行われていた。その後、昭和63年同一法人内に新大学（大阪国際大学）が枚方に設立され、守口と枚方で別々にリーダーズトレーニングを実施してきた。マンネリ化などを理由に学内における1日開催を行った時期もあったが、現在は学友会や体育会、文化会なども組織化され、平成20年には枚方キャンパス・守口キャンパス合同開催に漕ぎ着けるようになった。

平成20年度の両キャンパス合同開催のリーダーズトレーニングから、キャンパスセンターや教員などが、プログラムの企画と運営にも携わるようになった。平成20年度のプログラムでは、本学の非常勤講師に協力依頼をし、チームワークに関する理論とその内容に連動するよう ASE (Action Socialization Experience) を行った。ASE<sup>4)</sup>とは、別名イニシアティブゲームとも呼ばれ、一人では解決できないような肉体的・精神的課題に対し、グループのメンバーがそれぞれの能力を出し合い、協力しながら課題を解決していくアクティビティである。平成21年度は、昨年の初の合同開催に関する反省と更なる充実を求め、外部講師にも協力をいただき「帰属意識」をテーマに実施した。理論では、コミュニケーションとホスピタリティについて学び、実技では、昨年同様の ASE と財団法人日本レクリエーション協会が推奨するニュースポーツ「チャレンジ・ザ・ゲーム（以下、CG とする）」を行っ

## リーダーズトレーニングにおける効果の検証

た。CG<sup>5)</sup>とは、グループで交流しながら記録に挑戦し、遊び感覚で身体を動かす楽しさを味わえるレクリエーション・スポーツである。CGはASEに比べると身体活動レベルも低く、楽しみながら体を動かし、グループで協力しながら自らの記録更新を目指して行うというのが特徴といえる。

このように、近年のリーダーズトレーニングは、目的を明確にし、その目的に沿ったプログラムを実施している。平成21年度リーダーズトレーニングのプログラムは表1の通りである。

表1. 平成21年度リーダーズトレーニングのプログラム

時間	3月1日(月)	3月2日(火)
7:00		起床 朝食
9:30	受付 開講式  プログラム① 「コミュニケーションスキルとホスピタリティの重要性」	清掃・チェックアウト プログラム④ 課題発表  プログラム⑤ アウトドアクッキング
12:00	昼食	プログラム⑥ キャンパス単位ミーティング
13:00	プログラム② 「ニュースポーツ(チャレンジ・ザ・ゲーム)」 「ASE～コミュニケーションを体験的に学ぶ～」	「クラブ生から大学をよくする提案—学生自身の積極的な関わりを通じて— 発表「クラブ生から大学をよくする提案」
15:00	プログラム③	
16:00		閉講式
17:15	グループ討議 「スノーボード国母選手の服装問題についてどう考えるか？」	
19:00	夕食・懇親会	

### 3. 目的

本研究の目的は、平成21年度に実施された大阪国際大学リーダーズトレーニングの効果を検証するため、参加学生の大学や所属団体への帰属意識の変容を明らかにすることである。

### 4. 方法

参加する学生の大学への帰属意識を明らかにするために、集団同一視尺度(7項目版)を用いてアンケートを行った。数量化については、各質問項目について7件法で回答させ得点化し、その総計に対して一元配置の分散分析を行った。大学だけでなく自分が所属する団体(クラブ活動等)に対する帰属意識も同様の手法を用いて分析を行った。また、守口・枚方でのキャンパス間や体育会・文化会での所属組織間の比較には、二元配置の分散

分析を用い分析を行った。

補足として、大学や所属団体に関するイメージを自由に記入してもらい、それが良いイメージの場合は (+)、悪いイメージの場合は (-) をあわせて記入してもらった。

平成21年度のリーダーズトレーニングは、平成22年3月1日～2日にかけて1泊2日の日程で大阪府立羽衣青少年センターにて実施された。調査は、集合方を用い pre(開講式時)と、post(閉講式時)で実施し、対象は、学友会や各クラブの主将や主務などの幹部としてリーダーズトレーニングに参加した116名であった。

## 5. 結果

### 5-1 大学に対する帰属意識について

大学に対する帰属意識について、pre と post で一元配置の分散分析を行った。その結果、pre27.2点、post30.4点と向上し、1%水準の有意差が認められた ( $F(1,99)=11.17, p<.01$ )。次に、守口キャンパスの学生と枚方キャンパスの学生による違いを明らかにするために二元配置の分散分析を行った。その結果、守口キャンパスの学生(以下、守口学生)は、pre28.3点、post30.9点と向上し、枚方キャンパス学生(以下、枚方学生)は、pre24.7点、post29.3点と向上し、時期の主効果に1%水準の有意差が認められた ( $F(1,96)=12.5, p<.01$ )。次に、体育会と文化会での違いを明らかにするために二元配置の分散分析を行った。その結果、体育会は、pre25.0点、post30.1点と向上し、文化会は、pre27.9点、post30.2点と向上し、時期の主効果に1%水準の有意差が認められた ( $F(1,86)=12.3, p<.01$ )。守口と枚方のキャンパス間、体育会・文化会の所属組織間における群の効果および交互作用は認められなかった。

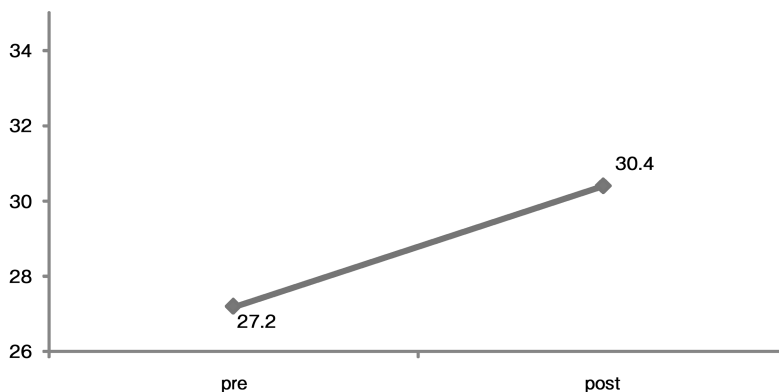


図1. 大学への帰属意識

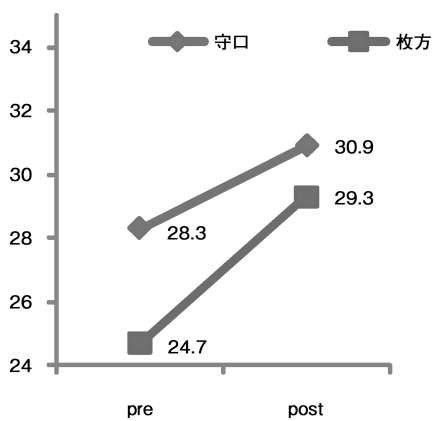


図2. 大学への帰属意識（キャンパス）

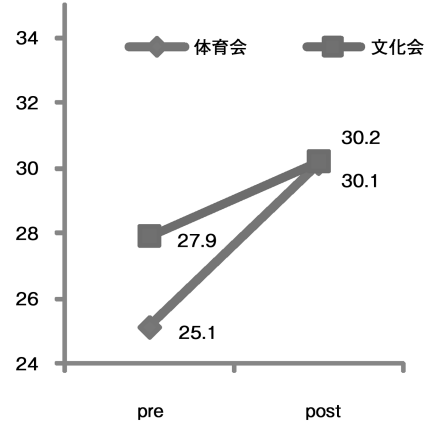


図3. 大学への帰属意識（所属組織）

## 5-2 所属団体に対する帰属意識について

所属団体に対する帰属意識について、pre と post で一元配置の分散分析を行った。その結果、pre33.2点、post34.2点と向上したが、有意差は認められなかった ( $F(1,98) = 0.95, n.s.$ )。次に、守口キャンパスの学生と枚方キャンパスの学生による違いを明らかにするために二元配置の分散分析を行った。その結果、守口学生は、pre33.8点、post34.3点と向上し、枚方学生は、pre31.8点、post34.0点と向上した。時期の主効果においても有意差は認められなかった。( $F(1,95) = 1.50, n.s.$ )。次に、体育会と文化会での違いを明らかにするために二元配置の分散分析を行った。その結果、体育会は、pre32.4点、post34.8点と向上し、文化会は、pre33.00点、post32.94点とわずかに低下した。時期の主効果においても有意差は認められなかった。( $F(1,85) = 1.10, n.s.$ )。守口と枚方のキャンパス間、体育会・文化会の所属組織間における群の効果および交互作用は認められなかった。

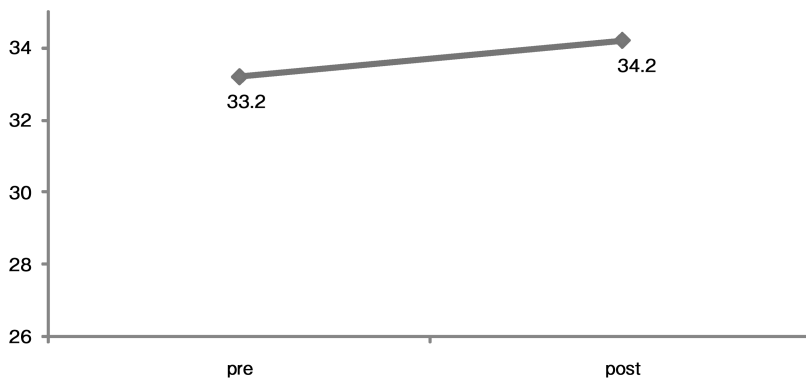


図4. 所属団体への帰属意識

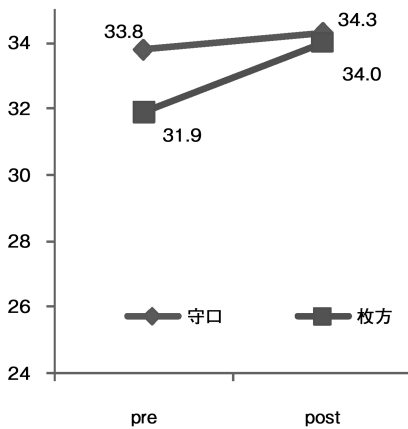


図5. 所属団体への帰属意識（キャンパス）

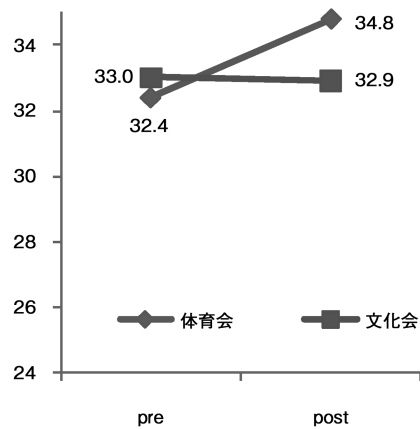


図6. 所属団体への帰属意識（所属組織）

### 5-3 イメージによる分析

大学と所属団体についてのイメージを自由に記入してもらい、それが良いイメージの場合は（+）、悪いイメージの場合は（-）を合わせて記入してもらった。アンケート記入に個人差や時間的な制約が生じた事は否めないが、大学に対するプラスイメージは pre で178件、post で171件、マイナスイメージは pre で113件、post で70件であり、 $\chi^2$ 検定の結果0.1% 水準の有意差が認められた。次に団体に対するプラスイメージは pre で229件、post で184件、マイナスイメージは pre で64件、post で48件であった。 $\chi^2$ 検定の結果、有意差が認められなかった。キャンパス毎や体育会、文化会毎の件数については、表2に詳細を示した。

表2. 大学と所属団体に対するイメージ

		大学		団体	
		+	-	+	-
pre		178	113	229	64
		171	70	184	48

		pre				post			
		大学		団体		大学		団体	
守口	体育会	67	39	85	23	77	18	82	13
	分科会	42	16	54	10	37	12	41	10
枚方	体育会	25	27	36	13	25	10	27	9
	分科会	44	31	54	18	29	27	34	15

## 6. 考察

大学に対する帰属意識については、pre27.2点、post30.4点と向上し、統計的にも1% 水準の有意差が認められた。キャンパスや所属組織においても時期の主効果は認められると

いう結果となった。平成21年度のリーダーズトレーニングにおいては、開講式の中でまず学務部長からの趣旨説明が行われた。次に学長から激励の言葉をいただき、学友会顧問からは課外活動団体としての心構えについての話しがあった。そして、キャンパスセンター学生サポートグループ長からは、学生に対する大学からの要望に関する話しがあった。学生は、入学後すぐに授業、クラブが始まり、慌ただしい日常生活を過ごしており、それほど「大学」という存在を意識することない。特に大学では全校集会や朝礼も無く、また学則も意識することない。全て自己責任において学生生活を過ごしているのである。そういった中、クラブの幹部となり、クラブのこと、そして大学のことを少し考え、緊張と不安の中でリーダーズトレーニングに参加した学生がほとんどである。そのような状況下で、学務部長、学長、学友会顧問、キャンパスセンター学生サポートグループ長からの話しや学生への期待などについての話しは、参加学生の心を掴み、大学という存在を大きく意識するきっかけになったに違いない。その後の講演も、それらの内容をしっかりと取り入れた話しであり、自分と大学との関係、大学と所属団体との関係が明確化されたのではないかと思われる。午後は様々な体験からコミュニケーションを学ぶといったものであったが、その中の一部では、教職員も学生と一緒に体を動かしコミュニケーションを深める一面も見られた。その後のグループ討議の課題は、冬季五輪スノーボード日本代表である国母選手の服装問題であった。同じ大学生として日本代表として日の丸を背負う自覚や国母選手が在籍する大学からの謝罪コメント、キャンパス内での応援の中止などが討議のポイントに挙げられた。そういった中からも、組織や社会、そして一番身近な大学という存在を意識することに繋がったと思われる。特に体育会の学生については、同じスポーツに携わるものとして様々な思いがあったようである。夜の懇親会では教職員が一緒になり楽しく交流を深め、2日目のアウトドアクッキングでも教職員が各グループに入り、学生と共に料理し食事を楽しんだ。野外教育の研究などでも、衣食住を共にし、活動面においても喜びや達成感を共に体験することによって人間関係や信頼関係が深まることが実証されており、教職員とのコミュニケーションを介しても大学という存在を大いに意識することに繋がったと思われる。

また、キャンパス毎や所属組織毎の得点変容を見てみると、いずれも得点は向上し、全てほぼ30点前後まで向上している。得点の高低を評価するだけではなく、両キャンパスの学生が、また体育会・文化会とそれぞれ違う性質を持つ学生が、大学への帰属意識をほぼ同じように持てたという点はリーダーズトレーニングの成果であるといえる。

次に所属団体についてみてみると、pre33.2点、post34.2点と向上したが、有意差は認められなかった。しかし、点数のみを見てみると、大学への帰属意識の得点より全てにおいて高く、自らが所属するクラブや団体に対する意識は高いということが明らかである。2日間のリーダーズトレーニングでは、キャンパスとクラブをできるだけ混合になるようグループ編成がなされた。それにより、日常と違う環境の中で様々な活動を行い、日常とは違う人間関係を作らなければならず、精神的なストレスも多少はあったと思われる。実技プログラムでもグループで協力し課題を解決するものや、記録を伸ばしていくようなものが意図的に組まれていた。普段の仲間関係ではアイコンタクトやフィーリングでわかり合



えることがこの環境では全く通じず苦戦が強いられた。そんな中、休憩時間には同じクラブのメンバーが集まり、それぞれのグループの情報交換などを行い、ひとときの安堵感を味わい、仲間（クラブのチームメイト）の存在の大きさを改めて感じていた。キャンパス単位のミーティングでも、「クラブ生から大学をよくする提案」というテーマのもと、大学の存在を意識しつつ、自分たちのクラブ運営について真摯に向き合い考えることができた。また、グループ討議の課題も体育会の学生にとっては、「スポーツ」や「大学生」などとある意味自分たちも同じ次元で捉え、自分が所属するクラブのことやチームメイトのことを客観的に考えることができたと思われる。統計的には有意な差は認められなかったが、体育会と文化会との得点の違いはそういった点で現れているのではないかと推察される。

組織上、大学という同じ枠ではあるが、環境の違う2つのキャンパスでのクラブ活動であり、preにおいては得点の違いも見られた。しかし、postではほぼ同じ得点になったということはリーダーズトレーニングの大きな成果であるといえる。

最後にイメージによる分析を全体でみると、preで大学に対するプラスイメージは178件、マイナスイメージは113件、団体に対するプラスイメージは229件、マイナスイメージは64件であった。postについては、大学に対するプラスイメージは171件、マイナスイメージは70件、団体に対するプラスイメージは184件、マイナスイメージは48件であった。記述式の回答であったため、2日の疲労や時間的な制約など個人差が生じ、それが回答数に影響している感是否めない。しかし、前後の差を見てみると大学、団体共にプラスイメージが減少したものの、マイナスイメージを見てみると、大学と団体共に減少しており、団体の16に対し大学では43ものマイナスイメージの減少となった。帰属意識は、自分が所属している組織に対する意識や信頼感が重要であるが、それらは日常の様々なイメージから形成される。大学へのプラスイメージは増加しなかったが、帰属意識の得点では有意な向上を見せている。それらを鑑みると大学に対する43ものマイナスイメージの減少は大きな成果であると考えられる。

## 7. まとめ

リーダーズトレーニングを通じて、学長他部長等の話しから大学という存在を理解し、また、大学教職員との交流などを介して大学や所属団体に対する帰属意識は高まった。ただ単に帰属意識が高まったという点を評価するのではなく、講師や教職員を介しての大学に対する信頼感、安心感は、大学の経営や運営に必要な不可欠であり、この2日間は大きな成果をもたらした。教職員や大学に対して心理的な距離が縮まり、クラブへの帰属意識が高まり、そして大学への帰属意識も今後ますます向上することを期待したい。しかし、大学というブランドは、経営者側のみで作るのではなく、学生自身が大学のブランドイメージとなり、共に作り上げ、築き上げていくものであることを忘れてはならない。それは、学生自身の問題でもあり、教職員の課題でもある。

リーダーズトレーニングに参加した学生が、今回学んだことを各クラブに持ち帰り、部員に対してどのようにフィードバックをしたのかは、本研究では明らかにされていない。



今後の課題として、リーダーズトレーニングに参加した各クラブの幹部が、部員に対してどのようにフィードバックし、それがどのように部員に伝わり、各クラブ運営に影響したかを明らかにする必要がある。

## 付記

本論の調査に関しては、本学心理コミュニケーション学科の石井滋教授、森上幸夫准教授のご指導の下行うことができた。また、田中誠守口キャンパスセンター課長、大久保正明守口キャンパスセンター学生サポートグループ長、貞光啓史枚方キャンパスセンター学生サポートグループ長には、様々な資料を提供していただいた。

ご協力いただいた皆様に深く感謝しここに厚く御礼申し上げます。

## 文献

- 1) 文部科学省ホームページ  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/12/daigaku/toushin/981002.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/12/daigaku/toushin/981002.htm)
- 2) 日本経済新聞社産業地域研究所 (2010) 「大学の地域貢献度ランキング」
- 3) 駅伝でつなぐ地域の絆 産経新聞2010年11月30日
- 4) 岡村泰斗、荒木恵理、伊原久美子、続木孝弘 (2006) ふりかえりを導入した ASE が参加者の学習過程に及ぼす影響、キャンプ研究第10巻第1号、pp50-53
- 5) 財団法人日本レクリエーション協会 (2009) チャレンジ・ザ・ゲーム ルールガイド

